NPO 法人　教育支援グループ　Ed.ベンチャー　広報誌　2016/01/26 発行　**NO.　11**

Ed.ベンだより

〒 242-0007　大和市中央林間 3-16-12 グリーンコーポ中央林間 107
電話／ Fax 046-272-8980　Email: toiawase@edventure.jp　URL http:/edventure.jp/

シリーズ**「貧困考」**　NO. 2

中学校では、みんな同じ服装をしている。制服、ジャージ、どちらもみんな同じものを着ている。髪型もあまり変わらない。嫌でもみんな似たような格好になる。その集団の中では「貧困」はとても見えづらくなっている。自分が「貧困」であることを必死に隠しているのかもしれない。でも、その中には確実に「貧困」が存在する。

私の勤務する中学校は比較的経済的に余裕のある家庭が多い。この地域で「貧困」家庭の現状を理解してもらうのは非常に難しい。以前、こんなことがあった。アパート暮らしの母子家庭で親子ゲンカが始まったとき、母親は「出て行きなさい」と子どもを叱った。母親も日々の生活に必死で、気持ちに余裕がない。だから、きっとこの言葉でしかその場を対処できなかったのだと思う。中学生の思春期を迎えた子どもはその言葉に反応して家を飛び出した。行く当てもない。友達の家は夜になれば追い出される。家に戻れないから街をブラブラと歩く。夜遅く、母親が仕事に行っている時間を見計らって家に戻る・・。ケンカは何度かあった。家を出たときに鍵を忘れた場合は、公園、近所のマンションの階段、ビルの屋上などで一夜を過ごす。お金もないから、次の給食までは何も食べない・・。「周囲」の家庭はそんな状況を理解できないと思う。「周囲」の生活の中にある親子ゲンカと「貧困」の生活の中にある親子ゲンカとでは、子どもが追いつめられる状況に大きな「違い」がある。

学校の中で、「違い」から「貧困」が見えることもある。例えば授業中。多くの子どもたちのペンケースには、20本近いペンが入っている。しかし、母子家庭の男の子のペンケースの中身は、えんぴつ2本（先が丸く、とがっていない）と小さな消しゴム、角が割れた定規だけだった。同じ制服を着て、格好は似ていても、ちょっとした持ち物にその「貧困」が表れる。学校の中でも「周囲」とは違う自分に気づかされる。

「貧困」の中にいる子どもたちは、「どうせオレ（私）なんか…」とよく口にする。「どうせ」には、「何をしても無駄」というあきらめの意味が強く含まれているように思う。何度も何度も「周囲」との「違い」を見せつけられ、「自分にはできない」、「家には金がない」、「みんなとは違う」という現実に、かれらの「貧困」の状態から抜け出そうという力が削ぎ取られてしまっているように見える。それはきっと、私たちには決して見えないところで、かれらはもっともっと追いつめられているのだと思う。いくつもの「違い」を目の当たりにして。（中学校教員レポート）

「貧困」が意味するもの

子どもにとっての貧困が、いったい何を意味するのか、その整理はまだ足りないように思う。たとえば、「貧困家庭には生活費のさらなる援助が必要である」ということには間違いはない。現に、福祉政策において、「生活援助費」の基準が厳しくなったり、判定が恣意的に抑制される中で、生活保護受給者への冷たい視線やバッシングが激しくなっている今、「さらなる援助」は一義的に語られなければならないことである。しかし、そうした上で、ここで確認したいのは、「それだけでは解決できない問題」についてである。上記レポートを例にとれば、鉛筆を二本しかか持たない生徒が、他と同じ数だけの鉛筆を支給されれば、子どもにとっての「貧困」が解決されるのかということである。

昨年あたりから、全国学力・学習状況調査（以下学状）の結果について貧困の問題が重ねられるように

なったが、今年は特に「貧困層の子どもたちを塾に通わせても、裕福な家庭の、塾に行かない子どもには学力的にかなわない」ということがはっきりと言われ始めた。家庭の中の「文化資本」の差がそれだけ大きくなってしまった‥ということである。ついこの前までは、教育にいくら投資したかで学力が決まるといわれていたが、状況はもっと進み、「教育に投資したとしても、なかなかその効果を出すことができない」層がはっきりと生まれ始めていると考えられるのである。

こうなると、子どもにとっての貧困は、「一生そのハンディキャップを埋めることができない」絶対的な宿命ということになってしまう。近代以降追求されてきた「社会的平等性」は損なわれ、中世以前の血統主義のように「生まれながらにして‥」という社会へ後戻りしているのだ。「どの家に生まれたか」で全く人生が変わってしまうのだから、貧困は、「子どもたちの未来の可能性を奪うものである」という認識を我々は持たなければならない。特に、子どもたちが未来へ向かう可能性をはぐくむ学校という場所にいる者にとっては、教育を無力化する暴力性を「貧困」が持っていることを肝に銘じなければならないと思うのだ。

「貧困」の範囲を考える

現在の日本で「貧困」の指標としてよくあげられるのが「相対的貧困」。全国の平均収入の半分以下の収入しかない家庭を指し、子どもたちの6人にひとりといわれる。この6人にひとりという数字は、先進諸国と比べても非常に高い数字であるが、感覚的には、まもなく貧困に滑り落ちるであろう「貧困予備軍」とでもいえる人たちが増えているのではないかと感じている。たとえば、大学生の奨学金の利用者の増大がその一つである。「1億総中流」と言われた時代の「親のすねかじり大学生」の趣は今はない。それどころか、高利の奨学金を借りてなんとか卒業する「借金大学生」ばかりではないか。とても6人にひとりではなく、多くの若者が、「貧困と隣り合わせ」なのである。こうなると、日本人がイメージとして追い求めた「中流層」はもう全くの幻想で、持てる者と持たざる者との差がどんどん広がり、埋めようのない階層格差が現出していると考えるのが正しいように思われる。つまり、もう貧困は多くの人にとって「他人事」ではなくなっているのである。

ここで思い当たるのが、二つある。一つは、二極化した学力分布である。学状の分析でもよく目にするようになった「ふたこぶ状の学力分布」は、こうした階層の表れと仮説を立てることができる。学校現場で階層格差の問題に取り組むとは、二極化した学力に対決することなのかもしれない。

もう一つは、階層格差の問題がグローバルな問題でもあり、今までにない様々な問題が、世界の中で現れ始めていることである。国際NGO「オックスファム」は、世界で最も裕福な62人の資産合計は、世界の下位層の36億人の資産合計に当たるという報告を出していると聞く。世界の中の対立は、今までに民族・宗教・資源の獲得・政治体制の違いなどを原因として、主に国家間の争いとして出現していたし、それは今でも変わっていない。そしてそこに、階層間の対立といった要素が入り始めているように思われるのだ。たとえば、イスラム国に世界中から貧困を背景に「戦士」となる者が後を絶たないことや、テロといった武力闘争手段が増えてきているのも、こうした動きの表れと考えられるのではないだろうか。

今、貧困につながる階層格差の問題から、どこにいても逃げられない状況が生まれつつあることは確かだと思われる。

Ed.ベンだよりでは、2回に渡り、「貧困」という言葉を原因の終着点とせず、その内実に迫る検討をしてきました。これらを受けて教育講演会を開催する予定です。多数のご来場をお待ちしております。

教育講演会のお知らせ

演題：**「グローバリズムの果て」を問う－新自由主義への決別と創造の意志－**

講師：平川克美氏（実業家・文筆家・立教大学特任教授）

日時：２０１６年２月２１日（日）午後１時半～（予定）

場所：大和市勤労福祉会館３階ホール　　※保育ご希望の方は 2 月 14 日までにお知らせください。

【理事の独り言】 1 月 17 日阪神淡路大震災から 21 年目を迎えた。当時まだ小学校低学年であった私は、地震の怖さはテレビで映し出された街の様子が現実として信じ難く、とても怖いと感じたことを今でも覚えている。数年が経ち実際に震災に直面した人と知り合いになった。その人は、「あの地震は、決して忘れられない。そして、忘れないで欲しい。」とある時話した。当たり前のことだが、そうではないのかもしれない。復興に対する一時的な盛り上がりは、時が経ち過去のものへと押しやられていく。追悼行事を行うボランティア参加者も高齢化が進み継続することが難しいと言われている。風化させないためにも、このつぶやきをきっかけにもう一度考えていきたいと思う。（MT）